

胸の中には木枯らしが吹いていた。

ぜえぜえと、ひゆるひゆると、絶えず鳴りつづけていた。

ごめんなさい、と母に言いたかった。けれど喋りたいと、息を整えたいという私の願いを、身体はいつだって裏切ったのだ。

多忙な父が、久しぶりに帰ってくる日の前日だった。あなたは気が高ぶるといけないから、と母からいつも言われていたし、仕事人間の父にどう接していいものか分からないでいたから、はしやぎようもなくて、だからいつもみたいに、大人しくお風呂に入ってごはんを食べていた。「ごちそうさま」を遮るように母が言ったのだ。

「けれど心配だわ。せっかくパパが帰ってくるのに、恵真の喘息は大丈夫かしら」

真実を言えば、母がそう言っただけで眉根を寄せるまで、私は喘息のことなんて考えやしなかった。さっぱり忘れていたのだ。ぜんそく、という言葉だけを喉の奥がぐるりとねじれるみたいなの、あの苦しさが思い出されて、私は「ご

ちそうさま」を満足に言えないままで席を立った。母を困らせてはいけなと思った。何度も何度も唾を飲み込んで、息を整えて。

けれど失敗した。横になっても、落ちつけと念じてても、ネブライザを使っても、なかなか発作は治まらなかった。

胸の中が嵐のようだ。ひゅーひゅーと渦を巻いた、その風音と、母の溜息が縄みたいにきつくねじり合わさって、耳に貼りついていく。母が電話する声が聞こえる。相手はきっと父だと思った。あのひとがあんなに声を高く荒げて喋ることなんて、父以外にはないのだ。「あなたの娘なのよ。早く帰ってきて。必ず。いつもそう。逃げてばかり。私ばかり一人で」……

常夜灯の橙の光は、涙で揺れてから網膜に届いた。手のひらにネブライザの入った袋を握りしめたまま、横になっていた。電話の声を聞いていたら、また喉が詰まる気がして、他のことを考えたかった。

何となく、ベランダに目をやった。遠くのバイパスを、車が通ったのかもしれない。左上から右下へ。舐めるような光の動きが、カーテン越しに人影を浮かび上がらせてい

た。なぜ、あのとき窓を開けたのか分からない。泥棒かもしれないと、一瞬は思ったかもしれない、けれど私はカーテンを開けてしまった。向こう側を見もせずに、鍵を下ろして窓も開けた。母には何も言わなかった。

私はこさらいさんと出会った。子さらいさん。色の薄い髪をしていた。ちゃんと日の当たるところで見ると、金色だつて分からなかった。瞳は晴れた日の空の色だった。けれどこのときはまだ知らない。彼は窓を開けた子供をじつと眺めていた。薄明かりでちらりと見上げた顔の、あまりに美しくて冷酷で、私は目を伏せずにはいられなかった。「俺が見えるか」

私はやはり彼を真つ直ぐ見返すことはできなくて、それでも一つ頷いた。ほう、という声が間近でした。膝をついて、私の顎を指でぐつと上げさせて、子さらいさんは私を見ていた。蜘蛛の巣にかかった蛾でも見るように、つまらなそうな目で。

「あと三カ月もしないうちにお前は死ぬ」
その言葉は七歳の心のまん真ん中を貫いて、私はほとんど窒息しそうな心地だった。このひとは、普通の人間ではないのだと、もつと神がかった何者かなのだと、幼心に勘

付いたのだ。

「お前の母は熱病のお前を寝かしておく。溜息をつく。お前はごめんなさいと言おうとする、しかし言えない。母親は目を離す」

電話をするためだ。子さらいさんの唇がくつと持ちあがるのが分かった。先程部屋の中で繰り広げられた光景だった。

「そして吐瀉物を喉に詰まらせる。息ができないまま、助けも呼べないで、お前は死ぬぞ、ガキ」

そのとき私の肌を這った電流は、誰にも分からない。他の人にはきつと分からない。

たすけて、と私は言った。子さらいさんは眉を寄せて、しばらく黙っていた。

たすけてください。もう一度言った。

子さらいさんは、だから子さらいさんと私は呼んだのだけれど、私を肩に担いで、ベランダの柵を飛びこえた。彼は彼の肩にぎゅつと頭をつけた。彼は落下しなかった。彼にしか見えない道のような何かがあつたのかもしれない。何もない空中を跳ねるように、愉快そうにけらけらと笑いながら、彼は夜を駆けていった。おい、見てみるよ。そん

なに怖がるなよな。その声で、私はそこで初めて目を開けた。私の住んでいた街から随分遠くに来たのかもしれない。目を凝らしても普段は見えない星の青明かりが、そのときたくさん目に飛び込んだ。下を見ても矢のように残像を残しながら、街の明かりが流れていく。どちらが天で、どちらが地なのかも私には分からないほどだった。

ああ、なんて夜だったろう。なんて夜だっただろう。

私は七つのときに攫われた。記憶だってある。神隠しとは多分違う。だって私は自分から攫ってくださいと願った。連れて行つてと。頼んだのは私。

子さらいさんに抱きかかえられたまま眠ってしまったって、次に目を開けたときには、優しい人が私の顔を覗き込んでいた。子さらいさんは見ていてぞっとするような凄絶な美しさがあつたけれど、その人は——氣遣わしげな、深い深い魂の底から絶えずぬくみを与えようとするような、荘厳な光が目につけていた。子さらいさんに比べれば随分と身近に感じられる、美しさと温かさと崇高さだった。彼女、なのだ私はその人の胸に抱かれていたから分かった。額

に冷たい手が置かれて、前髪をどかされて、頭を撫でられて、私はゆつくりと息をしていた。

「どういうつもり」

「死ぬ臭いがした。助けるというから連れてきたんだ」

「それで」

「お前が世話をしろ」

「まだこんなに小さい子なのに」

「ほう、小さい子を見捨てて平気な顔ができるやつだったかお前は」

彼女は手元にあつたうちわを手にとって子さらいさんに投げた。まともに顔に食らつて子さらいさんの目つきは鋭くなる。私は怯えて、ひ、と声を出してしまつたけれど、彼女は気にもせずに私に微笑みかけた。

おはよう。初めまして。お名前は。お姉さんに教えて。

優しい声だった。姉さんだと。子さらいさんは鼻で笑う。

「なかにしえま」

「えま、ね」

ぱたん、と畳の音がした。私の手からネブライザの入った袋が落ちたのだ。漢字で書かれた名前を目を細めて眺める間も、彼女はずっと私の頭を撫でてくれていた。

「帰りたくなったら、いつでも言いなさい。恵真」

私は帰りたと言わなかった。その日から、子さらいさんと、姉さんと、三人の暮らしが始まった。昔話の本で見たような日本家屋は、ちょうど休みに遊びに行く父方の祖母の家によく似ていた。

私は本を読んだり、姉さんと一緒に庭の花に水をやり、ごはんを作る手伝いをしたりして何日か過ごした。姉さんを「ママ」と呼んでしまったのは、おやつにドーナツを作っているときだったろうか。可愛らしいと感じられたのかもしれない、姉さんは目を見開いたあとときゅつとつむって、私をぎゅうぎゅうと抱きしめた。私の目は姉さんの白いエプロンのフリルと、薄桃色の小さなリボンでいっぱいになった。

「恵真、ありがとうね。ありがとう。間違っちゃったね」「うん」

「恵真のお母さん、ちゃんというものね。お母さんから恵真を取っちゃだめなもの」

ああ粉を触る前でもよかった、と言いながら姉さんは私の背中をとんとんと叩いた。

「恵真のお母さんがどんな人か私は知らないけれど、お母さんは恵真がこんなちっちゃいタネのときから、赤ちゃんになるまでずっとお腹に抱えてたんだよ。大事に抱えてたんだよ。それは覚えておこう」

「ママのところに帰らないとだめ？」

「帰りたくなったら帰ればいい。お母さんを好きにならないとだめって言ってるんじゃないの。十ヶ月くらい、お母さんが恵真を大切にしていたから、私は恵真と会えたんだよ」ふしぎだね。もう一度ぎゅつと抱きしめられる。姉さんの黒い髪が頬に当たって、くすぐったいのを我慢しながら、私は母と一緒に料理をしたときのことを思い出していた。まるで娘が失敗するのを確かめるみたいに、何も言わないで観察していた母のこと。何かしでかした私を見るときに、母の目は輝いた。ほら、やつぱりそうなるでしょう。ママは分かったたのよ。「もう一つ教えてあげる」という言葉と溜息が、私はとても苦手だった。

大切にされていたことがあったのだろうか、私に。

子さらいさんは普段お家にはいなかった。いつの間にか帰ってきては、ご飯を食べて眠っていた。眠るときは三人一緒だった。姉さんと子さらいさんに挟まれて、眠りに落

ちるその瞬間まで、とんとんとお腹のあたりで姉さんの指は動いていた。

「ねえ、この子に何ができると思う」

例えば財産よ、そんなものないでしょ。あっても「ここ」から持ち出すことはできないのだし。

「何が言いたい」

「そうそうこの魚、恵真が焼いてくれたんだよ」

「そうなのか、ご苦労」

子さらいさんのねぎらいに、私がううん、と返す前に二人の話はどンドン難しくなっていくた。

「言葉や数字を扱う技能や知識！ つまりは文化的資本が必要なんだよ。恵真がどこに行っても大丈夫なように。そういう状態が約束されているようにしなくちゃ」

「はつきり言え間抜け」

間抜けも、阿呆も、馬鹿も、子さらいさんはよく姉さんに向かつて使った。けれど姉さんは本気で怒鳴ったりしないのだった。いけない言葉を使うのに、どうして二人が仲良くしていられるのか私は不思議だった。不思議という話

をすれば、あんなにたくさん喧嘩をしても、二人を仲良くだと認識していることだって不思議だった。しかしそのとき私は姉さんの、どこへ行っても、という言葉で終わりを意識せずにはいられなかった。何の。この生活の終わりの。それは嫌だった。姉さんと子さらいさんに嫌われないようにしなければ、と私は一人で決意していた。

家を出てどれだけ走っても、周りには木々と沼と、誰もいない道や川があるだけだ。二人以外の人間に私は会ったことがなかった。学校はきつとないのだろう。次の日から姉さんは私に勉強を教えるようになった。どこから買ってきたらしい教科書やドリル、たくさんの本には私の名前を書いてくれた。

「恵み、っていうのはいつくしむってこと。愛を、優しさを向けるって言うこと。恵真の真は、真実ってこと。ほんとうで真っ直ぐってこと」

二人で何回も名前を書いた。ただの本が、私の本になった。虫の叫び声しか聞こえない部屋。机や布団のほかには物が何もなかった子さらいさんと姉さんの部屋に、私は根を下ろしたのだ。

勉強は私が十八になるまでずっと続いた。高校で習うよ

うな数学も、もつと難しい理論や、思想みたいな観念的なことも、料理や掃除などの家事も一通り、私は姉さんから教わった。あの人はいったい何者だったのだろう。私に分かるのは、子さいさんは人ではないなにもかで、姉さんは彼に気に入られたひとだということだった。

紙の上の知識だけでは限界があると感じたのだろうか、ある日姉さんは家を空け、私は珍しいことに子さいさんに隠れ遊びをしてもらっていた。どこに隠れてもなぜだかすぐに見つかってしまったから、つまらない気がしたけれど、子さいさんは隠れるのがへたくそだったから、何度も私が鬼をした。私が鬼ね、というと子さいさんはひどく樂しげに笑っていた。家に帰ったときには居間——一番そこで過ごしていたのだから居間と呼ぶのが適当なように思う——にブラウン管が設置されていた。得意げな姉さんに、子さいさんは文句を言わなかった。

いつだったか、テレビで児童虐待か何かの特集が組まれていたときがある。どんなに怒鳴られても、殴られても、子どもは親が大好きなのです。そんなナレーションが耳に届いて、私は飲みこみかけたごはんが石に変わるのを感じ

た。私は殴られたことはない。頬を叩かれたことはあるけれど、その後の母はいつもよりも優しくいらいだった。母は友達の間でも評判の優しい「いいママ」だったのだ。

家に帰りたくないと願う私は、おかしのだろうか。

いきなり泣きだした私に慌てて、姉さんは背中を何度もさすってくれた。優しい声で尋ねられる、どうしたの、になかなか答えることができなかった。私は悪い子だった。実の母親に対する愛情の薄い、今も姉さんを困らせる駄目な子だった。だって母の声がどんなふうだったかも、たった三ヶ月で忘れてしまった。

「お前何かしたのか」

「この子の声が聞こえない、黙ってて」

子さいさんは何も言わずに家を出た。

涙が止まって、私がつたない言葉を操って語った胸の内を、姉さんは黙って引き受けてくれた。急かすことも、遮ることもなかった。全部話して、すんすんと鼻を鳴らす私に、姉さんは言った。

「お母さんが得意げにすればするほど、あなたは自分だけでは何もできないって気持ちになったのではない？ 失敗を許されるたびに、自分は悪い子だって思ったんじゃない

い？ 優しくされると息苦しくなかったか？」

彼女の真剣な、眩く鋭く光を映した眼差しを覚えている。自分でも言葉にするのを諦めた気持ちは、ひとつひとつほどかれて私の胸に収まった。姉さんの親指は、そのときだけ私の涙をぬぐうためにあった。

「子さいさん、びっくりさせて、怒ってしまったかな」

「怒ってない怒ってない。あの自分の得にならないことはなーんにもしない奴がわざわざ連れてきて、そばに置いてあるんだもの。あの子は恵真のこと気に入ってるんだよ」

「私、まだ戻りたくない……戻りたくないって思ってたなら、ママの声、もう思い出せない」

「そうか。お母さんの声、忘れちゃったか。けれど、忘れちゃったの、嫌だっと思ってたんですよ。淋しいって思ったんですよ」

大丈夫、と姉さんは私の背中を叩いて、いまだ息の落ちつかない私を宥めた。

「忘れるままにまかせて。淋しいと思う、その気持ちを大事にするんだよ。それが、一番美しく思い出すってことだから」

「私、いつか姉さんのことも忘れちゃうのかな」

「もし離ればなれになって、しばらく経ったら忘れちゃうこともあるかもしれない、けれどね、そのために思い出を作るんだよ。いつか忘れてしまおうとしても、終わるとしても、怖がっちゃだめだ。君は生きるんだよ、ちゃんと」
姉さんの目が私から離れた。いつ戻ってきたのか、柱にもたれて、子さいさんが立っていた。

私の喘息は、何が原因だったのだろう。二人の家に来て、小麦粉なんかをかまったり、掃除をしたりしても発作は起きなかった。田舎で、空気が澄んでいるからだろうか。

いつも母に氣遣われていた。心配だわ、と言われていた。そうされるたびに私の胸はぜえぜえと鳴りだした。

歳を取って、十六のころだったろうか。姉さんの哲学の本を読んだのは。カントの「道徳形而上学原論」だったと思うのだけれど、本を読んでようやく、私は少しだけ母に對する罪の意識から離れられた。自分の薄情さを誤魔化すための言い訳じみているけれど、私は真実、手段として扱われていた。あのとき、私は父の関心と呼ぶための方策だった。母の抱いていただろう不満はおそらく、自分ではど

うにもならない環境や、父の心に原因があった。けれどこれらに対して母は無力だ。母が自由にできて、彼女から逃れられることのないのは私だけだった。私は彼女の上手くやりそこねた人生の象徴で、枷であり、罪深い生き物でもあり。そして私はひとりで人質にならなければならなかったのだと、今は思っている。私は母が好きだった。母に気に入られたかった。何もかもへたくそだった自分が、いつも申し訳なくて堪らなかった。

けれど戻れなかった。

あの部屋に帰る夢を見ると、いつだって身体は震えた。

子さらいさんは自由だ。いつもどこにいいのか、私は知らなかった。人によく似た姿をしていたけれど、人ではないのは、私を誘拐する逃走経路で知っていた。けれどたまに忘れそうになる。美しい容姿も、姉さんは慣れ切っているような態度だったし、傲慢なもの言いが常な子さらいさんであっても、口げんかの勝率は五分といったところで、姉さんほどの気安さはないにしても、私も子さらいさんに慣れてしまっていた。

それでも時折、信じられないようなことは起こった。私と姉さんとの掃除をしていたとき、急に地面が揺れて、姉さんに向かって棚が倒れてきたことがあった。押しつぶされてしまう、とぞっとしながら瞬きをする、何をどうしたのか、いつの間にか姉さんを庇うように覆いかぶさっている子さらいさんがいた。ぱりん、と陶器の割れる音がした。

硬質な低い轟音はびりびりと私の喉の骨をまだ震わせていた。子さらいさんは不安定な息をついて、怪我はないかとも聞きたげに、姉さんの頬を撫でて、しばらく抱きとめていた。私が大丈夫？ と声をかけるまで、離してくれ、と姉さんが口を開くまで、子さらいさんは姉さんを離そうとしなかった。

「子さらいさん、姉さんが好きなの？」

十になるころ、尋ねたことがあった。どこから新しく姉さんが持ってきたオープンで、ロールケーキを作った日だった。

「あ？」

「姉さんのこと好きなの？」

「色気づきやがって、このガキ」

色気づく、という言葉は随分と鋭く下品さを非難するよう響いたけれど、動じなかった。このひとはいつもそんなのだ。私は視線を落とす。姉さんお手製の水玉ワンピースの下で、少し胸も膨らんできてはいたのだけれど、はたして自分も姉さんほどの大きさにいつかなるのだろうか、と疑っていたように思う。下手な夢は見るものではない。

「あの阿呆面のどこに惚れにやならん？ だがな、アレは俺のだ」

「姉さんはものじゃないし、アレじゃないし」
ふわふわしたケーキにフォークを沈ませながら、子さらいさんは唇を尖らせた。

「俺のだ。いつか俺が連れていく」
食べたい分が切れたらしい。甘いものなんて、と馬鹿にしそうなひとだと思っただけけれど、意外にも彼はデザートが好きだった。

「まだ帰りたくないか」

「うん」

「そうだな、今戻ってもやっぱりお前は死ぬぞ。夫会いたさに母親に見殺しにされる。ありがたく思え」

「うん」

「……あいつが必要か」

うん、と私は返した。子さらいさんの冷たい腕を握った。連れて行かないで。

「連れて行かないよ。しばらく貸しといてやる」

生クリームたっぷりふりのケーキを口に入れて、彼は言った。
「これみたいに半分にできればいいんだがな」

そんな昼過ぎの会話を姉さんはしっかりと聞いていたらしい。夜中三人で布団に入ってすぐに、あのさあ、と声をあげて、私と子さらいさんの手を握った。

「恵真、分教えたでしょ。三分の一で自分のこと好きでいなさい。もう三分の一で私のことを好きになって、ほんで残った三分の一でこやつを好きにないなさい」

私だってそうするし、君も、そう君だよ何驚いてるの。
「お前ロールケーキは勉強の一環か。分厚いのと薄いのがあると思ったら」

「その通りだよ、ありがたく思いなさい」

「なんだその口調、馬鹿にしてるのか」

「君の真似」

豆電球の柔らかい明かりのなかで、些細な言い合いをす
る二人を私は笑った。

「いい考えだね」

「ね、そうでしょ。そうやって私達、何もかも分けあうん
だよ。ちゃんと一になるように、誰も損しないように」

私達はいつも三人でいた。私も、思いっきり喧嘩をし
り言い合いをしたりすることもあったけれど、それが普通
で、ちゃんと元通りになる信頼関係のなかで暮らすことの
意味と価値が、そのころになってようやく分かったのだ。

十五のときだった。お風呂上りに部屋に入ろうとして、
少し開いた襖の隙間から、私は見てしまったのだ。

姉さんの白い細い首筋は、奥行きのある月明かりにぼん
やりと照らされていた。子さらいさんはその肩口に噛みつ
いていた。目があった。口を離れたときに、姉さんの裸の
背中へ、生きた蛇が這うように赤い線が、つ、と伸びてい
った。睨まれて凍りついた私など気にせず、子さらいさ
んは姉さんの血を啜っていた。紙よりもなお、姉さんの身
体は白くなっていった。

「気絶してるだけだ」

「何で」

「これは俺のだ。こいつだつて知ってて俺に血を分ける」

襖一枚隔てた、ぼそぼそとした会話だった。

「俺にはこいつが要る。お前もか」

「連れて行かないで」

弱々しい声しか出せなかった。子さらいさんの顔だつて、
いつも以上に血の気がなかった。最近はずっと、子さらい
さんの白い顔が青ざめていたことだつて薄々気付いていた。
いつから。なぜ私は気付かなかつたのだろう。二人が普通
じゃないことくらい知っていたのに。

「そうしないとだめなのね」

「そうしないと俺が死ぬ」

「私の血を飲んでもいいよ」

「お前ではだめなんだ。飲んだとしてもこいつに殺され
る」

「わかった」

「ああ、まだしばらくはこうしてしよう」

貸しとしてやる、とはもう子さらいさんは口にしなかつ
た。

「お前、今帰ってもやっぱり死ぬぞ」

「子さらいさん、私に死んでほしくない？」

返事はなかった。私はその場を立ち去って、本棚のある部屋で膝を抱えて眠った。なぜ苦しいのかわからなかった。何がそんなにも気を高ぶらせるのかわからなかった。子さらいさんが一番苦しそうな顔をしていた。かなしいいきものだった。人は弱くてかなわん、お前から死の匂いがする。そう言つてのける彼は人紛いで、姉さんはまだ人の体温を保持していた。いつか連れていかれたら、姉さんはどうなってしまうのだろう。本当に、一番姉さんのことを連れてきたくないと願っているのは、もしかしたら子さらいさんなのかもしれない。私が目を閉じたあと、姉さんの髪に鼻先を埋めて、背中にしがみつくようにして眠る子さらいさんの姿は知っている。切なげに彼の髪を撫でてやる姉さんの姿だって知っていた。

「何でここにいるの、姉さん」

傲慢な態度で話を切り上げる子さらいさんを、溜息一つで許す姉さんに、聞いたことがある。

「あの子を一人にできないでしょ」

そう言つて姉さんの目はいつよりも優しい色をしていた。

どうして私は二人がなにに苦しんでいるのか知らないのだろう、どうして助けられる方法を思いつかないのだろう、なぜ分らないことがあるのだろう、まだ子供なのだろう。愛は、分けてもらったものだった。恵んでもらつて、ようやく獲得したものだ。私のために割かれた一部分だった。苦しい。地獄の恋だ。私の気持ちだつてほとんど恋の形をしていた。どちらに対して？ 馬鹿馬鹿しい。

十八の誕生日だつたと思う。時が正しく進んでいたのなら。姉さんと子さらいさん、珍しく二人で台所に立っているのを、私は本を読みながら眺めていた。放つておけば喧嘩が始まったけれど、言葉にして書くほどの険悪さはないのだ。子さらいさんは世界一優しい馬鹿を言うひとだったし、姉さんは最も軽やかに溜息をつく人だった。

最近はいつても、姉さんが真ん中だったから、私が真ん中になつて寝るのは久しぶりだった。初めて二人に会つた日のことを、私は思い出した。とんとんと、お腹の上で跳ねる姉さんの優しい指はあのとときと何一つ変わらなかった。

そうか、お前、背が伸びたな。

何年たったと思ってるのさ、と姉さんは、きつと今気付きましたという顔をしている、ひとではないひとに言った。

綺麗になった。

そう言って子さいさんは、整いすぎていていつもどこか人間味の薄い顔をくしやりとさせて笑った。

終わりの予感があったのだ。らしくない台詞を子さいさんに言われたときから、何となく。そしてこの生活が始まったときから、いつだって覚悟していた。

静かな朝だった。目が覚めると二人は居なかった。

外に飛び出した。振り返らなかった。振り返ったらきつと、屋根のないひどく荒れた廃屋が目についた。走って、走って、私はどこまでも駆けていった。ばしやばしやと浅い川を渡って、苔の生えた岩で滑って、ああ、ああ、と言葉にならない叫び声を上げながら、私は水を跳ねあげながら川底を拳で叩いた。

連れて行って。連れて行ってよ。どこにも行かないで。私だっけ好きだった。二人が好きだった。戻ってきてよ。一人にしないで。お父さん。お父さん。お母さん、お母さん。

ん、お母さん。

一度も、とうとう口にするこたのなかつた呼び方で、私は二人を呼んだ。息が苦しくなっても、喉が痛くても叫び続けた。返事がかえらないことは分かっていたのに。

私は選ばれなかつたのだ。彼らに選ばれなかつた。いつだって二人と一人だった。姉さんを連れて行かないでほしかった。子さいさんに連れて行ってほしかった。二人ともどちらとも、同じくらい私は好きだった。好きだったから憎らしかつた。憎んでもやっぱり憎み切れなかつた。一緒に過ごした十余年があつたから。

さみしかつた。とてもとても、何年かかっても治りそうにないくらい淋しかつた。二人のことは私しか知らない。私しか覚えていない。誰とも分かりあえない。この気持ちには誰にも分からない。

私が寝ていると思つて、月明かりに目を見交わす二人を覚えてる。ぼそぼそと軽口を叩きあう二人を。姉さんの首筋の白さも、それに噛みついて爛々と輝いていた子さいさんの瞳も。姉さんを腕の中に閉じ込めて、ただ抱きとめていたあのひとの姿を。

あの二人は、現とも幻ともつかない、あわいの世界から消えてしまった。いよいよ救われがなくなった身体のほか、お互いのほかは何も持たずに。

そのことを考えると私は悲しくて、そう、私は私のことばかりを嘆いたわけではなかった。いつか来ると予想していた、置き去りにされた痛みよりも、ふたりぼっちの悲劇は、私の中で何度も繰り返し繰り返し再現されては増幅されて、胸をめちゃくちゃに荒らした。私よりも、この薄情な私よりも、いくら人間くさかった、優しさを知っていた二人。そして祈った。

愛している。愛していた。離れないで。頼むから、誰も二人を離したりしないで。お願いします。お願いします。

沼の前で、泣き疲れて眠っているところを、私はこの近所の人に保護された。両親にも会えた。それまで娘の不在が二人を繋いでいたようで、私が帰ってきてからあっさり離婚してしまったけれど。今は父に引き取られて、けれど一人でなんとかやれている。姉さんに教わったことのほとんどを、私は身につけているから。人付き合いは、やは

り少し苦手だけれど。

由緒ある巨大オカルト研部長さん。これでいいかしら。話すことなんてもうこれくらい。

そう言いながら、四時間半もかけて田舎の山奥までついてきてくれた友人の目を見た。もう夕暮れで、彼の表情は陰になってしまっていた。人の顔も分からないから、たそがれどき。「誰そ彼時」と書く。そう教えてくれたのは姉さんだった。

記憶は鮮明さを失っていく。まず二人の声を忘れていった。顔も朧気にしか思い出せなくなる。いつしか曖昧な像すら、瞼の裏に結ばなくなるときが来る。

忘れるままにまかせて。淋しいと思う、その気持ちも大事にするんだよ。それが、一番美しく思い出すってことだから。

私の記憶にしか、二人は居ない。けれど私の中にちゃんと残っているものはある。

子さいさんのお腹に頭を乗せてお昼寝をしたこと。起きたら夕方で、姉さんの包丁のどんとんという音と、ラジオの音が響いていたこと。あまり遊べなかったとべそをか

いたら、子さいさんが何も言わないで頭をわしゃわしゃとかき混ぜてくれたこと。その手つき。起きた？ という姉さんの声。ごはんができたよ、というあの言葉は魔法。擦過傷も、悪夢も、不安だって全て、消し去ってくれる呪文。

お風呂上がりには、髪を乾かさないと、姉さんが飛んできて、後ろからタオルでごしごしと拭いてくれた。その力加減と、もう、風邪ひいちゃうよ、という声が好きで、たぶん、それだけで、私はわざとそのまま部屋を歩き回った。

母の夢を見たとき、声を出さないと泣く私に真っ先に気付くのはいつも姉さんだった。どうしたって眠れないとき、子さいさんが真ん中に来て、腕枕をしてくれた。私と姉さん両方に。両腕をかかしみたいに伸ばす子さいさんは寝苦しかろうと、ごめんなさい、と言うと、ガキが余計な気を使うな、と鼻で笑われた。

——眠りにつく一瞬前の、二人の声。

何でそんなに怖がるの。力が強いから。そう生まれてしまったから、俺だってそうなりたいわけじゃなかったんだ。ただ、ただ。爪が当たったら破けそうだ、こいつの皮膚は。

大丈夫。大丈夫だよ。

ひんやりと頬に沈む、あの指の冷たさは子さいさんのだ。あの冷たさで私は、自分の体温を知った。

——忘れてしまおうとしても、終わるとしても、怖がっちゃだめだ。君は生きるんだよ、ちゃんと。

姉さんの言ったことを、薄桃色の唇の動きを思い出しながら、ようやく私は、目の前の友人が、私の話を一度も噛みわなかつたことに気が付いた。

月刊缶じうす 10月号 通巻191号
2013年 9月25日発行

編集人 喜多正也 小島遊 張子 菊田康右 黒坂憂姫
発行所 広島大学文団BOX